

町長交代、避難所閉鎖までの1,111日。



フタバから  
N u c l e a r N a t i o n Ⅱ  
遠く離れて  
〔 第二部 〕

報道では決して伝わらない人々の声が突き刺さる。

監督 | 船橋 淳

# INTRODUCTION

『フタバから 遠く離れて 第二部』は、福島第一原発事故により避難を強いられている、福島県双葉町を追ったドキュメンタリー映画『フタバから遠く離れて』の続編である。第一部は、埼玉県加須市にある旧騎西高校へ全町避難をした後9ヶ月を追つたものであり、第二部はそれから現在までの約3年間を記録した作品である。2012年第一部公開当時オーディトリウム渋谷は連日満席となり、公開数日でアンコール上映が決定された。その後も各地での劇場公開、国内約100箇所で自主上映が行われ、海外ではベルリン国際映画祭ほか40以上の映画祭に招待、海外版DVDも今秋発売予定と、大きな反響を得ている。

長い避難生活で町民の間に不満が多く出はじめた双葉町の避難所や仮設住宅では、町議会と町長が対立。2013年2月に井戸川克隆町長（当時）が辞任に追い込まれた。町長選挙を避難先で行うという異常事態の末、異なる町政方針を打ち出した伊澤史朗氏が当選、役場は福島県いわき市に再移転した。町長交代により揺れ動く双葉町は帰宅困難区域に指定され、さらには中間貯蔵施設の建設設計画が出されるなど、事故に起因する様々な問題が大きな影を落としてゆく。歴史に翻弄されてきた土地で暮らす人々の姿を克明に映し出し、目に見えないものが消えていく様と原発行政がもたらした矛盾を描く。





# STORY



## 2012年——[冬]

原発事故から1年が過ぎようとしていた頃、双葉町民7000人の避難生活はなおも続いていた。野田佳彦総理(当時)の収束宣言があったにも拘らず、双葉町役場は未だ埼玉県加須市の旧騎西高校にあり、そこで町民約627人が共同生活を送っていた。

## 2012年——[春]

校門前に町民が集まり、震災から一年の慰靈祭が行われた。旧騎西高校に残ったのは400人弱である。

## 2012年——[秋]

7000人の復興会議「仮の町計画」が都内で開かれた。これは、町民同士が意見を出し合うという民主的アプローチで行われていた。

東京電力は月々 12万円の“精神的苦痛”への慰謝料と、避難に要した実費については賠償をしたが、最も本質的で高額の、町民が所有した土地と家への補償はなされず、蓄えの少ない高齢者は避難所から独立できぬままであった。

## 2012年——[冬]

井戸川町長と町議会が対立していた。福島県主催の中間貯蔵施設に関する会議に欠席したことをきっかけに、井戸川町長への不信任案が全会一致で可決され、議会解散か辞職かを突きつけられる。「自分たちだけ埼玉へ逃げて、町長に捨てられた」と町長を非難する県内の仮設住宅に住む住民たち。2011年夏から続けられ

ていた全町民が住める「仮の町」建設のための「7000人の復興会議」も中途で頓挫。

2013年1月23日、井戸川町長は辞職を発表。会見で「現状からして福島には住めない。議会の圧力に屈して福島県いわき市に庁所を移したこと反省している。それも辞任の理由の一つです」と話した。

## 2013年——[春]

3月10日、避難所で投票を行うという異常事態の中で町長選挙は行われ、伊澤史朗氏(59)が当選。旧騎西高校が東日本大震災の最後の避難所となっていること、原発避難町村で県外に役場を置いているのは双葉町だけであること、それに伴い県側との温度差が出てきていることを述べ、これらを改善していく意向を示した。

11日、騎西高校の町長室へ登庁した伊澤町長は、福島県内への帰還政策を打ち出した。「役場を福島県いわき市に移転し、福島県の復興に双葉町も足並みを揃えて参加すべき」という方針を示した。この時点で双葉町の地域別避難状況は、加須市(高校133人含む)628人、郡山市737人、福島市449人、白河市266人となり、福島県いわき市には約1444人が住む「いわき南台仮設住宅」があった。

南台仮設住宅は、多くの原発作業員のベッドタウンでもあった。福島第一原発作業員の河野弘幸さんは震災当時、放射線管理の仕事をしており、吉田所長と共に不眠不休の収束作業に従事した。「正直、誰もがあんなところに戻るのは無理だと思っている。しかし、あそこを一番知っている者が行くしかないだろう、自分が今まで食わせてもらったものに対する最後のケリをつけたい。これは後片付けだ」と語った。実は、河野さんの父・茂さんも、福島第一・第二の計10基の原子炉を担当した電気回路のエンジニアだった。茂さんは「日本の原

発はぜったい壊れない」と言い切り、それをプライドとしていた。そのため、事故後は深いショックを受け塞ぎ込むようになり、2011年4月避難先の病院で他界した。

齊藤宗一さんは、仮設住宅開設以来の自治会長。線量の高い双葉町南部郡山地区にはうれん草畑を持つ農家だった。すべてが「埼玉の双葉町」中心で進められる町政に苛立っており、旧騎西高校と仮設住宅の衝突を語った。

実際、仮設では電気、ガス、水道は全て自腹だが、旧騎西高校では全て無料。さらには弁当まで無料だった(2012年9月に弁当だけ有料化)。他の市町村が復興のため除染が進められている一方、双葉町だけがまったく手つかずであったのも不評の原因だった。「井戸川町長は『私達は棄民ですか』と国に楯突いているが、自分が福島を捨てている」と強い非難の声が聞かれた。町政懇談会では「加須の高齢ばかりが叫ばれ優遇されるが、仮設や借り上げ住宅に移った人は皆、高齢でも見切りを付けて自立している」という意見も出た。そして、ついに旧騎西高校の閉鎖が発表される。住民の平均年齢68歳と、ほとんどが高齢者になっていた。

1960年以前、小さな一寒村だった双葉町に原発を誘致したのは岩本忠夫町長だった。当時は大企業が来たと町民は喜んでいたという。「町として生きるために原発が必要」それが立候補時の言葉だった。1971年に1号機の運転が開始すると、付近にはアメリカ人作業員のためのCE村がつくれられた。「原発立地地域には学校があり、外人さんがたくさんいた。夜になると外人さんたちと食事したりお酒を飲んだり、“原発さんとは深い仲”と避難者は振り返った。しかし、当時も原発に反対した人々は存在した。船旗(ふなばた)をつくる梅田京染店を経営していた梅田孝子さんの夫・忠さんは、双葉町で当時原発反対運動を行っていた。「もしもの時、車で逃げることは



できないから、そうなった時は二度とここへは帰って来ることはできない。双葉は2つに割れるのではないか」と言っていたという。だが、次々と建設される原発によって、町は潤い、雇用が生まれ、商店街は活気づいた。「今は悪口ばかり言っているけれど、40年間は恩恵を被ったと思う」と避難者たちは言う。

2013年5月、放射線量別に3つの新しい避難区域が再編され、双葉町は96パーセントが帰還困難区域となった。町はバリケードにより仕切られ、一時帰宅のためのスクリーニング基地が各地に設けられた。11回目の一時帰宅をした梅田さんが見たものは、荒れ果てネズミの糞だらけになっている我が家だった。駆除剤を撒き、旗を何枚か持ち出しが、夫の写真は迷った末、家を守ってもらいたいからと置いていく。ガムテープで玄関の戸締りをし、家を出るときに「家族がいないのは寂しい」と吐露した。

## 2013年——[夏]

伊澤町長は、全原協（全国原子力発電所立地市町村協議会）の平成25年度定例総会に参加する。再稼働を推進したいという国・経産省を、敦賀、川内などの原発立地市町村が支持。大きな拍手が湧き起る中、伊澤町長は何も言えぬまま一人違和感を覚えた。終了後「福島第一原発のある4村と、それ以外の町村の考え方の大きな開きを感じる」と話した。

役場の引っ越しの日、旧騎西高校からは荷物が運び出される。

いわき市植田地区に、プレハブの双葉町新庁舎が開設された。開所式で伊澤町長は「双葉町復興を加速させる。帰還困難区域でも除染を始める」と息巻いた。

## 2013年——[秋]

旧騎西高校は退所ラッシュとなった。梅田さんも10月7日に退所、いわき市の借上住宅へ移った。町民は次々と移転、2013年12月27日残り最後の5人も退所した。

## 2013年——[冬]

南台仮設で暮らしを続ける齊藤家は、600年以上続く双葉町で最も古い家系の一つだった。古くは相馬藩の武家だったが、百姓になり養蚕・稻作など長く農業を続けてきた。85歳の齊藤よし子さんは「悔しいけれど、どうにもならない」と涙した。昭和2年に建てられた自宅は、彼女と同い歳だという。広島・長崎の原爆、水俣病、足尾銅山鉱毒事件、沖縄の基地問題、福島の原発事故、福島をこれらと同じようにしてほしくないと齊藤宗一さんは言う。

2013年末、環境省は除染で出た土壌を保管しておくための中間貯蔵施設を避難区域につくるという計画を発表。その建設領域は、齊藤さんの自宅地域すべてを覆うものだった。

## 2014年——[春]

東日本大震災から3年が経ち、いわき市に移転した町役場で黙禱が捧げられていた。

唯一除染作業を行っていなかった双葉町も、遂にモデル除染を始めた。除染後の線量は2.553usv、事故前の約60倍以上であった。

伊澤町長夫妻は双葉町に入った。ゴーストタウンと化した町を歩き、馴染みの店や、かつてそこを営んでいた人々に想いを馳せた。皆、全国へ散ってしまった。日本記者クラブでの会見では、長きにわたる避難生活を強いられている町民を想い涙した。

埼玉県の旧騎西高校避難所は正式に

閉鎖されることになった。大掃除には多くの町民が参加し、いわき市からは伊澤町長や役場職員も参加した。そして、町長室を一人掃除していたのは井戸川前町長だった。「悔しい思い、悲しい思い、多くの支援金を手渡していただき嬉しさで涙も流した。とても世話になったが、人間関係の無常さも味わった。人間模様が凝縮されていた、人生の半分以上をここで経験したようなもの」と振り返った。かつては1400人を超える双葉町民が住んだ埼玉県立旧騎西高校避難所。その門が役場職員の手で閉じられた。

いわき市では国・環境省による中間貯蔵施設の説明会が初めて行われた。大ホールは大熊町、双葉町の住民約1000人で埋めつくされていたが、石原伸晃環境大臣の姿はなかった。環境省、復興省の事務方だけが来て、中間貯蔵施設の場所、大きさ、建設スケジュール、そして補償について説明。30年後に福島県外に持ち出すことを条件に、双葉町・大熊町に受け入れを求めていた。町民たちは全く納得できなかった。憤慨した井戸川さんは質疑応答で多くの苦言を呈し、公開質問状として石原環境大臣宛ての手紙を読み上げ、手紙を突きつけた。齊藤さんの自宅地域は中間貯蔵施設になると言われている。「本当に返りたいですよ、このうちに」と呟いた。

放射線量による区域分け、賠償問題、町役場の移転で住民が分断され続ける双葉町。中間貯蔵施設の線引きにより、さらに分断されようとしている。故郷の町には、未だ一人も帰還を果たしていない。

# DIRECTOR'S STATEMENT



原発事故は遠い昔の出来事だったかのように、風化が進んでいる。

その中で原発避難民を映した映像は、メディアのここかしこに散見されるが、それはみな「被害者」「かわいそうな人たち」というレッテルを張った描写である。

それを見て「ああ、かわいそうだ」と思うもの

「そんな話題、もう見たくもない」と思うもの

こうした認知の在り方そのものが僕はおかしいと思う。

その認知全体をひっくり返し、見直したいと思う。

なぜか。

福島第一原発の電力はほぼ100%関東圏に送られてきた。  
僕たち東京の人間、都市部の人間が使って来た電気である。

そして、60年代～日本の高度成長の中、「原子力 未来の明るいエネルギー」(双葉町に架かっている標語アーチ)として原子力のポジティブなイメージを支え、原子力にGOサインを出してきたのは、僕たち日本人全員、日本社会そのものだからである。

元は、原爆と同じ核の毒であり、悪魔に魂を売ったゲーテのファウストのように、その大きなしっぺ返しを受けながら、それが自分達に起因していることをどうしても認めたくない。

そんなしっぺ返しの強烈な〈痛み〉に対し、僕たちは距離を置いて直視を避けている。他人のせいにする方が楽だから、国と東電を責める。

遠く離れることで、それを直接には感じなくなることで、うやむやに過ぎ去ってゆくものがこの世の中に、たくさんあるということ。

原発避難民は「かわいそう」なだけじゃない。

僕たちもその加害の一端を担っているのだ。

正義の欠如に僕たちも加担しているという不都合な真実。

今の国の態度は、金と権力と歪んだ理屈でムリヤリで黙らせようと

いう前近代的なやり方。(それは、いまの首相にせよ、県知事にせよ、また世界のあらゆる国で見られる市民の弾圧である)

住民説明会では、環境省が中間貯蔵施設の補償を、東電が賠償の窓口とする、という縦割りが徹底され、すべて事務的な補償＜金目＞の議論に落とし込まれている。

そもそも誰がこのような犠牲を押し付けるのだろう?という問いは、議論されない。

そうすることで、国は責任追及は免れる、  
のではなく、「僕たち」が責任を免れている。

巨大な責任回避装置を私たち自身がサポートしている。

他人の痛みを思いやるだけじゃ足りない  
自分の加害について思いを馳せる

それがぬくぬくと電気を使いつづける、悪魔に魂を売り続ける、私たちが感じるべき、ささやかな倫理であると思う。

## 中間貯蔵施設について

中間貯蔵施設には、根本的な問題がある。

それは放射性物質汚染を引き起こした加害者が法的に特定されていないことであり、この無責任な放置が諸悪の弊害を生み出している。その一つは、今まで関東圏の電力のために利用してきた双葉町・大熊町が、さらに「核のゴミ」をなぜ被らなければいけないのか、という倫理的な矛盾である。

町は交付金・雇用を得ていたのだから、「利用された」のではない。関東圏とはイーブンな関係であり、いま原発事故のリスクを背負うのは受け入れた側の自業自得ではないか、という声もある。しかし、そういう「リスク」(=町におそらく30年以上は帰還できず、土地・家・財産を失い、国・東電に賠償をケチられ、それまでの人生があらゆる面でグレードダウンしなければいけないという多大な損害。まさしく福井地裁の大飯原発再稼働差し止め判決で出した「人格権」の侵害である)を、半世紀前、原発受け入れ・操業開始の時に誰がちゃんと説明したというのだろう?たかだか40年間の町の繁栄の



ために、それまで1000年以上つづいていた町の歴史と、311以後ずっと続いているであろう町の将来・家系の継承が霧散してしまう巨大なリスクを、地方に背負わせるのは不公平ではないだろうか。

沖縄と福島に共通する犠牲のシステムがここにある。それは自業自得ではなく、宗主国と植民地の関係に近い、利用するものと利用されるものの関係であったと思う。

だから、利用してきたものの責任と罪を明らかにせずに、ゴミだけを押し付けるのは、新たに犠牲のシステムを生むことを容認することになるのだ。

「金目」の条件交渉となる前に、話さなければいけないのは、上のような倫理の問題である。

僕たちは、双葉町を含む福島避難区域の人々の「人格権の回復」を何よりもまず求めるべきと思う。

そんな正義の追求があってこそ、現実問題として、「核のゴミ」とどうするのか、を話し合う対等な立場になる。

対等でフェアな立場で話し合うことを互いに尊重するという、理性と倫理が、住民説明会の現場で求められているものなのだと思う。

そんなのお花畠の理想論、という人もいるだろう。

しかし、そんなフェアな立場を獲得できなかったため、水俣病患者は50年以上の年月、待ちぼうけにされ、疲弊させられ続けた。

国民と地方の市町村が一緒になって、この前近代的な、アンフェアな対話環境を変えてゆく努力をしないと、単なる金目の話に落とし込まれてしまうのだ。

だから、正義の欠如については、ちゃんと主張をしてゆくべきだし、二度と「犠牲のシステム」を生んではならないと、関東圏や原子力の電力を使って来た僕らもそれを全力でサポートすべきなのだと思う。

なぜなら、ぼくらはみな福島原発事故の当事者なのだから。

[監督]  
**船橋 淳**(ふなはしあつし)

1974年大阪生まれ。東京大学教養学部表象文化論分科卒業後、ニューヨークで映画を学ぶ。デビュー作『echoes』(2001年)が、「アノネ国際映画祭」(仏)で審査員特別賞と観客賞を受賞。第二作『Big River』(2006年、主演:オダギリジョー)は、「ベルリン国際映画祭」「釜山国際映画祭」でプレミア上映。東日本大震災で町全体が避難を余儀なくされた、福島県双葉町とその住民を長期に渡って取材したドキュメンタリー『フタバから遠く離れて』(2012年)は国内外の映画祭で上映。2012年キネマ旬報ベストテン第7位。著書「フタバから遠く離れて 避難所からみた原発と日本社会」も出版される。劇映画『桜並木の満開の下に』では被災地を舞台に物語を展開し、ジャンルを越えて、震災以降の社会をいかに生きるかという問題にアプローチしている。最新作は「小津安二郎・没後50年隠された視線」。

[劇場用映画]  
Feature Films

- 2012 『桜並木の満開の下に』  
(2013年全国公開)
- 2012 『フタバから遠く離れて(NUCLEAR NATION)』  
(2012年全国公開)
- 2009 『谷中暮色(Deep in the Valley)』  
(2010年全国公開)
- 2006 『BIG RIVER』(2006年全国公開)
- 2001 『echoes』(2001年全国公開)

## クラウドファンディングの支援により、 待望の公開決定！

東日本大震災から3年目となる2014年3月11日から、インターネット上で制作資金を募るクラウドファンディングを開始。期間限定で第一部をネット公開したところ約16万人が視聴、全国で延べ600人もの人々が支援に参加した。結果、100万円以上も目標金額を上回り、期待が高まる中での待望の公開決定となった。

## 双葉町避難状況

(2014年8月1日現在、双葉町公式ホームページより)

※2011年3月11日の人口から死亡者を除き、震災以降の転出者及び転入者、出征者を含むものであり、町として支援対象となる人口の避難状況。

県内避難(全28市町村)	4,055人
↳いわき市 = 1,881人(最多)	
県外避難(全39都道府県)	2,977人
↳埼玉県 = 890人(最多)	
	計7,032人

# フタバから遠く離れて N u c l e a r N a t i o n II

## [ 第二部 ]

2014／日本／114分／HD／カラー  
©ドキュメンタリージャパン／ピックリバーフィルムズ  
[監督]船橋淳 [テーマ音楽]坂本龍一[for futaba]  
[撮影]船橋淳、山崎裕 [音楽]鈴木治行  
[プロデューサー]橋本佳子  
[記録]Playtime [宣伝]佐々木瑠郁  
[公式HP]<http://nuclearnation.jp/jp/>  
[Facebook]<https://www.facebook.com/futabakara>  
[Twitter]<https://twitter.com/futabakara>



### [お問い合わせ]

[宣伝]佐々木瑠郁  
Tel:090-7405-6715  
Email:white.aquamarine@gmail.com  
[劇場営業]Playtime(斎藤)  
Tel:080-3732-6809 FAX:03:3409-9178  
Email:yosaito9@gmail.com

# 11月、ポレポレ東中野ほか全国順次公開！